

## 世界臨床検査通信シリーズ-2

# RCPCのルーツを探る ～R-CPCって正しいの？

国際臨床病理センター・自治医科大学名誉教授 河合 忠

日常広く利用されている臨床検査データを正しく理解し、診療に効率的に反映させるためには、医学生時代はもとより、卒後も生涯にわたり勉学と経験を積み重ねなければならない。その一つの教育／学習方法として Reversed Clinico-Pathological Conference (RCPC) があり、現在わが国の医学科、保健学科、臨床検査関連の研修会、そして一部の薬科大学などにも広く普及している。わが国で、初めて RCPC が公開されたのは 1965 年 1 月 23 日、日本臨床病理学会（現・日本臨床検査医学会）関東支部第 3 回例会で、その記録は同年発行の「臨床病理」12 巻 6 号に残されている。当時、日本大学医学部病理学竹内正教授と臨床病理学土屋俊夫教授が企画され、米病理学専門医資格を取得して帰国したばかりの竹田節医師（横浜市大）、米山達男医師（放医研、日大）、河合忠（国鉄中央鉄道病院、順大）の 3 名が演者で米国での剖検例について発表した。その後、同シリーズは 1 年間に合計 4 回開催された。竹田、米山両先生は間もなく米国に移住されて活躍されたが、日本に残った小生は 1966 年 11 月から日本大学に臨床病理学助教授として赴任し、翌 1967 年度から医学部学生のための臨床病理学教育カリキュラムに、講義形式と BSL (bed side learning) での小グループでの対話形式を含めたのが卒前教育の始まりである。BSL での対話形式の RCPC の最初の記録は、1970 年日本医事新報ジュニア版 No.96 であり、同誌（医学部高学年に無料で配布）が廃刊になった 2009 年まで毎号連載された。また、RCPC の症例を集録した最初の単行本は土屋、河合、河野編：「演習臨床病理学」中外医学社（1973）である。幸い、その後、他の医科大学でも採用され、今日では、臨床検査の関連の学術集会、研修会、などでも広く実施されるようになった。ところが、いつのころから誰が使い始めたのか R-CPC、Reversed-CPC と、ハイフンを挿入した見出しが散見されるようになった。最初は、“ワープロの入力ミスかな？”、などと気に留めていなかったが、近年になってさらに広まっているようで、RCPC を初めて卒前／生涯教育に導入した筆者にとって一寸気になっている。英語圏の数人の友人はハイフンの挿入に否定的である。R-CPC が正しいかどうかは英語学者にお任せするとして、1965 年の論文では R.C.P.C. と略称したが、間もなく英語圏でピリオドを省略するようになり、それに習って RCPC を使ってきた。NHK「クローズアップ現代」（正しくはクロス・アップの筈）のように日本的英語の造語にならないことを望みたい。RCPC の詳細については下記の文献\*を参照。

\*河合忠：JACLaP NEWS No. 49 & No.50, 1999(日本臨床検査専門医会)